シマフクロウの森づくり百年事業植樹祭

虹別コロカムイの会
代表　舘　定宣　　北海道

《シマフクロウ初公開》

大規模な森林伐採や河川改修などの開発の影響で、生息地の森（営巣木、寝ぐら）と食料（小魚）を奪われ、絶滅の危機に瀕しているシマフクロウ（推定生息数100羽余）が安心して棲める森づくりを目指し、6年目を迎えた1999年、「虹別コロカムイの会」は、会員（52人）一同心を新たにして共生に向けた新たな保護啓発活動に着手すべく、年明け早々から準備を始めた。

シマフクロウのことを「コタン・コロ・カムイ」（アイヌ語で村の守り神という意味）と呼ぶ。これに地域の名前を冠して会の名称とした。だが、100年先にシマフクロウがいつでも見られるような地域にしたいという「シマフクロウの森づくり百年事業」の趣旨や活動そのものに賛同し、厳しい審査を経て会員の資格を得た人といえども、その過半数は野生のシマフクロウを見たことがない、というのが実情であった。そこで、ヒナがある程度育った時期（6月）を見はからって、会員に公開することにした。

相手は国指定天然記念物で、日本版レッドデータブックの絶滅危惧種。営巣の最もセンシイティブ（神経過敏）な時期を過ぎたとはいえ、それなりの警戒心はある。かって誰も手がけたことのない取り組みだけに、頼るべき見本はなかったが、1回あたりの時間や人数を限定するなどの方法で、鳥に対する影響を最小限に抑え、約1ヶ月間で延べ50人の会員が、野生のシマフクロウと対面した。会員の1人は「こんなに大きなフクロウが、かってはすぐ隣に棲んでいた。われわれはそれを忘れてしまっていた。何としてでも森を再生しなければ・・・」と語った。

《第5回西別川流域コンサート》

当会が毎年手がけている3大事業（西別川流域コンサート、シマフクロウの森づくり百年事業植樹祭、人工巣のメンテナンス）は、本年度も継続して事業を行い、いずれも盛況のうちに所期の目的を達し、会員相互の親交も図られた。

シマフクロウの生息に適した環境は、①営巣に必要な太いうろ（樹洞）のあるハルニレやミズナラなどの多い広葉樹林で②エサとなるヤマメやオショロコマなどの小魚があふれる自然河川で③近親交配を避ける“回廊”的な役割の河畔林が連続的に残されている、という3点に集約されると思われる。

しかし、日本の中でも豊かな自然の残されているといわれる北海道東部とはいえ、大規模酪農による大型草地やリゾート開発などで森林伐採が進み、川も河川改修や孵化事業によって遡可性魚類が上流で産卵できないようないびつな構造にある。

それはシマフクロウにとっては、外堀を埋められ（森林伐採）、兵糧攻めに遭う（エサ不足）というダブル・パンチを意味した。開発という未必の故意が、シマフクロウを“絶滅の淵”に追い込んだのである。彼らは、エサを求めて各地の養魚場やサケ・マス孵化場に棲みつくようになった。もはやそういう場所でしか生を永らえない状態にまで追い込まれてしまっている。

営巣に必要なうろ（樹洞）の代用品として環境庁は巣箱の設置を進めている。エサは養魚場やサケ・マス孵化場などで働く人々の優しいまなざしによって、辛うじて供給されてはいる。だが、彼ら

の生息に不可欠な広葉樹林は、相次ぐ離農によって「遊んでいる牧草地が増えた」といわれる現在も、遠い昔に作られた何十年ごしの「事業計画」によっていたずらに伐採され続けているというのが、現状である。
これば かりは、人工巣などの“代用品”で急場しのぎはしているものの、小手先の対症療法では、どうにもならないのだ。
「森を育てる気持ちを育む方法はないだろうか。西別川流域の源流部から上流～中流～下流～河口（海域）の人たちが心を一つにできるような何かが・・・」。
そんな思いが芽生えはじめていたころ、当時の役員の１人が、八ヶ岳山麓の山梨県高根町でしらいみちよさんに出会った。しらいさんは環境の大切さを自作の歌に盛り込み、それを澄んだ声で歌い上げる歌手として、全国をコンサートで巡業しているという。
「摩周湖の伏流水を源泉とする西別川の近くから来ましたが、標茶の方にも一度お越し願えませんか」と申し出た。その日は、道東一帯でマグニチュード８.１の地震に襲われた北海道東方沖地震（1994年10月４日）の発生からわずか11日後。コンサート会場で有志がカンパを募ってくれたほどで、そこにしらいさんの心を動かす何かがあったのかもしれない。翌年秋、彼女は「西別川源流コンサート」に来てくれた。
しらいさんの澄んだ歌声は、地域の住民を動かした。そしてコンサートを西別川流域全体に広げたいという思いとなり、早くも翌年、実現した。源流部の虹別から海に向かってカヌーで下るように、５会場でのコンサートが始まった。虹別、西春別、中西別、別海、そして根室海峡のオホーツク海に面した本別海へと、西別川流域コンサート５地域連合会実行委員会が結成された。本別海は、徳川幕府時代に「献上鮭」の産地として知られ、美味さの秘訣は「摩周湖の伏流水の存在が大きい」と古くから言われており、漁業者自身が偉大な川の存在と果たしている役割を知悉していた。４年目の1999年は、５会場で過去最大の約1000人を集めた。しらいさんは、流域コンサートで欠かせない歌となった「西別川」を熱唱した。
水の流れよ～天の子供余～ゆれる水草～夢をさずけよ～ほら森が呼んでいるから～ほら鳥が呼んでいる～西別川よ～天の流れよ～いとしき命守れよ～いとしき命守れよ。
流域の心は、いままさに１つになろうとしている。コンサートに先がけて、摩周湖の伏流水を源流として根室海峡に注ぐ西別川の写真を撮り続けているアマチュア・カメラマン、永井徹さんの写真展「西別川からの風」が、別海町図書館で開かれ（５月７日～14日）、地域の住民も改めて川の懐の深さと河畔に住んでいることの幸せを確認した。

《シマフクロウの森づくり100年事業第６回植樹祭》

６月６日は、恒例の植樹祭である。コンサートに携わった地域住民だけでなく、コロカムイの会の呼びかけで、釧路や札幌、東京などから家族連れら約150人が駆けつけた。ミズナラやハンノキなど2750本が、西別川源流部の町有地などに植えられた。天候にも恵まれ、５歳から70歳まで世代を越えて汗を流した。植樹事業は６年目を迎え、河畔に近い原野や牧草地など、通算では8.5haに、11500本ほどの木を植えたことになる。ササが根を張る石混じりの土壌を掘り起こすために使われる「島田鍬」は、当初は慣れない人が多かったため鍬先の部分を折ってしまうこともしばしばだったが、先端をFRP（強化プラスチック）で補強してからはおれにくくなった。参加者は「自分の植えた１本でシマフクロウが生き長らえるかもしれない」と思いながら鍬に力を込めた。
植樹が終わると、恒例の昼食を兼ねた交流会が始まる。第１回の植樹祭に参加した小学生が、すっかり大きく高校生になっていた事に驚き、アレル

ギーで牛乳の飲めなかった子が、不思議なことに植林がきっかけで飲めるようになったり、有志によるコンサートなど、さまざまなハプニングの続発と、森づくりに心する人と人との出会いが「同志」のすそ野を年々広げることにもつながっている事を感じる。総延長75kmの西別川流域には、日本一の酪農地帯が控えている。折しも、乳牛の頭数拡大による糞尿公害と河川への流入、風蓮湖の富栄養価が顕在化し始めていたころだった。生活のためとはいえ、切り過ぎてしまった木のことを多くの住民が考え始めていた時期でもあり、流域の植生を復元しようという意識の環は、ここにきて静かな広がりをみせているようである。

《巣箱のメンテナンス》

3大事業のラストは、巣箱のメンテナンスである。使われなかった巣も含め、高さ数mの位置に掛けられた5個の人工巣に梯子を使って登り、チップ（木くず）を新たなものに換える作業である。他の動物も“住宅難”とみえ、スズメバチやエゾリスの巣として使われていることもあり、毎年11月中旬には、翌春の巣になるかもしれないシマフクロウのために店子に出ていただく。家賃も取らずに借家として勝手に使わせているわけだから、彼らも文句は言えません。1999年は10段もの巨大なスズメバチの巣があり、参加者を驚かせた。メンテナンスを毎年行っているせいもあってか、当会が管理している巣の利用と繁殖率は抜群で、これまで掛けっ放しにしていた他の人工巣も、最近はメンテナンスを実施するようになったと聞く。素人のやり方がプロを動かした例と思われる。

このほか7月15日には、シマフクロウのエサとなるニジマスの放流、9月26～28日には、ドングリ拾い（約1万個）と種の植え込み、10月15日には、エサとなるカラフトマスの放流を行い、本年1月1日には、新しい巣箱をかけた場所の近くにエサ場を設置するなどの作業も行った。

《神様とのひととき》

どんな事業のときでも、終わった後はアルコールで体を清めている（有料の懇親会）ことも、当会の特徴かもしれない。いつも楽しい語らいが夜更けまで続く。養魚場でしばしば行われる“寄り合い”では、ときに「俺を肴に酒を飲んでいるのなら・・・」とばかりに、シマフクロウが姿を現すときがある。最大で7羽が寄り合った夜もある。オスとメスの鳴き合いは、ほぼ毎晩聞くことができるし、灯の間接照明によって、不器用なハンティングを見ることもできる。幸い、コロカムイの会が発足して以来、13羽が新たに誕生し、このうちの約8羽が元気に活動している。会が管理している地域のフクロウの数も、約10羽となった。これだけの高密度な生息地は、道内でも極めて珍しいといわれている。いま一番頭を悩ませていることは、『せっかく元気で育っても、周りはまだ丸裸に近い状態。生息地を広げるための森がない』出来る事を続けて行きます。

別海漁組